



# 年末年始の伝統行事

市内各地には、その地域に古くから伝えられている伝統行事や、神社で奉納されるその地域独特の舞いや神楽などがあります。今月号では、その中の12月から1月にかけて行われた行事をいくつか紹介します。

## 【木太刀の舞い・写真①】

御厨町寺ノ尾地区にある八幡神社（森川典幸宮司）で12月15日、木太刀の舞が奉納されました。

この舞は、同神社の例大祭で奉納される神楽の一つ。木製の太刀を担ぎ鈴を片手に舞う神楽で、江戸時代からの伝統行事です。太刀が大きいほど翌年は豊作になるといいうい伝えがあります。

氏子の久保秀信ひでのぶさんが、地区内の山からイタビの木を切り出し、約3時間半かけて、長さ1・46メートル、重さ24キログラムの木太刀を製作。今福神社の早田伸次しんじ禰宜ねぎが太刀を担ぎ、笛と太鼓に合わせて舞を奉納し、集まった地区住民約20人が来年の地区の安全と五穀豊穡を祈願しました。

## 【佐々木祭・写真②】

12月24日、志佐町池成地区に30年以上前から伝わっている「佐々木祭」が行われました。

池成地区には、平戸藩士でこの地域を治めていた「佐々木様」が参勤交代で留守中に妻の不義の噂を耳に

し、大酒を飲むようになり亡くなったという故事が残っています。

今では「佐々木祭」として佐々木様に仕えていた家臣の子孫にあたる同地区の5世帯が命日といわれるこの日に持ち回りで毎年開催しています。

この日、地区にある佐々木様の墓参りをした後、今年の当番にあたる石井實男じつおさん宅に5世帯の夫婦が集まり、直径40センチ・重さ3・3キログラムの大杯に注いだ酒1升を回し飲みし、霊を慰め親睦を深めました。

## 【もぐら打ち・写真③】

無病息災などを祈願する「もぐら打ち」が1月初旬、市内各地で行われました。

星鹿地区では1月6日、小中学生14人が集まり、地区内の約120戸を2班に分けて回りました。

子どもたちは玄関先で「祝いましょう 祝いましょう 祝いのもちをくれたなら 末も繁盛で世もよかる…」と大きな掛け声を掛けながら、新わらで作った長さ約80センチの「もぐら打ち棒」で玄関の床をたたきました。





**【鬼火たき・写真④】**

毎年恒例の鬼火たきが1月7日、市内各地で行われました。鬼火たきは、しめ縄や門松に火を放ち、1年間の無病息災や家内安全などを祈願するものです。

調川町松山田地区では、久保川志丸さん(62)が昨年11月中旬に、新わら約300束、竹約150本を使い、高さ約6・5尺、幅5尺の四角すいのジャンボ鬼小屋を製作しました。年末年始にかけて、地域の友人などが集まり鬼小屋の中で暖をとりながら会話を楽しむなど、大いに親睦を深めました。

1月7日には、地域住民など約70人が集まり、持ち寄った門松などを鬼小屋の中に入れ、久保川さんが火を放つと鬼小屋は、勢いよく燃え上がりました。

**【百手講・写真⑤】**

志佐町庄野地区の王嶋神社で1月8日、百手講が行われました。この行事は的に当たった矢の数で今年の豊凶を占うもので、市の無形民俗文化財に指定されています。

今年の射手は山元次生さん(39)と崎田広則さん(32)です。烏帽子と狩衣姿の2人が約10尺離れた場所から直径約50センチの的をめぐり、計約60本の矢を放つと9本が的中し、見

守った住民から大きな歓声と拍手がわき起こりました。

中川明宏宮司は、「中国では昔から9は縁起の良い数字とされています。大変素晴らしい」と話していました。

**【大般若・写真⑥】**

大般若の経典が入った箱の下をくぐり1年間の無病息災を祈願する「大般若」が志佐町の8地区と福島町の5地区で行われました。

江戸時代、この地方に疫病が流行したとき、大般若経を祈とうして回ったところ疫病が治まったことが始まりとされています。

志佐町里地区では11日、還暦と厄入りを迎える人などが重さ約10kgの経典が入った箱を交代で担いで、地区内の約200戸を「だいはんにゃー」と掛け声を掛けながら回りました。

各家では、担ぎ手にお酒などを準備して出迎え、経箱の下をくぐって、1年間の無病息災を願いました。

